

# たくさんのがあるかもしねないね

## 路地を曲がらず日高屋へ行く

夜、散歩をするのが好きだ。

夜の住宅街を歩くのが好きだ。

ただし怪しまれないようにしないといけない。現代ではどこにでもカメラがついていて、きっと映っているんだろう。あまりよそ見をしてはいけない。

本当は庭の木や光る窓や壁の作りを見て歩きたい。でも見てはいけないのでぼんやり歩く。しかも、のんびり歩くわけにはいかない。ウォーキングというスポーツを嗜んでいるふうのせめてものスピードが必要で、背筋を伸ばしている必要がある。なので音楽はとても重要だ。

歩くときは、ワイヤレスのイヤホンをつけて音楽を聴いている。そのときそのときで聞く音楽が違うので、決まつたものはない。最新のチャートを流すこともあるれば、90年代ヒットのプレイリストの場合もあるし、好きなアーティストをずっと聞くこともある。まあ普通だ。鳴らす音楽のビートに合わせてリズムよく歩いている。そうすることで、若干のスポーツさが醸し出せると思つている。着るものもなるべくスポーティなものがいいとは思うけど、そこまでは今のところは気にしていない。そんなふうにまずは怪しまれることを第一に準備をして、夜の街を歩く。

住宅街を歩くのが好きなのは、どこか今の自分じやない世界に入り込めるからかもしれない。旅先でも同じように思うことがあるが、普段歩かない路地を歩いている自分が不思議に思える。ふと見上げたマンションの窓に明かりがついていて、レースのカーテン越しにオレンジ系の電灯が見える。見上げているから天井の一部しか見えない。そのやわらかな色合いにどんな生活があるんだろう。他の部屋では、白っぽい電灯の色が見える。カーテンを閉めて明かりが隙間から見える家もある。まだ帰宅していないのかもしれない家もある。

そこで視点を入れ替える。路地を見上げている自

分を窓から見下ろす。彼はマンションを見上げている。少し気になつたことが彼の中にあつたかのようにな、空やマンションを見上げて、また前を向いて歩いていく。

もしここに住んでいたらどんな生活なのだろう。そのときに浮かぶシーンは、実は自分が思い描いていた胸の奥底にあるのかもしない。

いくらでも<sup>は</sup>はころがついて、一軒家にいる<sup>三</sup>、庭のある家にいる<sup>二</sup>、一人暮らしのアパートの<sup>一</sup>、電車通勤のない職場との往復の<sup>四</sup>、半年くらい海外へ行く生活の<sup>五</sup>、どこかで選択を違えていたら<sup>六</sup>、辿り着いたかもしねない<sup>七</sup>があるのでだろう。

等間隔に道路を照らす夜の街灯の下を歩いている<sup>一</sup>と、照られた光ごとに一つひとつ<sup>二</sup>のシーンが浮かび上がるかのようにイメージが断続的に現れる。街灯の光を抜けるごとに後ろにあつた自分の影が前に回つてくることも、それが繰り返されることも、終わりのない夢のようだ。

考えことをしながらのときも何も考えないときもどちらもあるけど、日常と非日常の境界を行つたり来たりすることで、すこしだけ頭の中がすつきりする。何か答えが見つかるわけではない。勝手な想像として、歩いて体を動かして自分勝手な妄想をすることで、脳の中にすこし余裕ができるのかもしれない。漬んでしまわないように流れを作つてゐるのかもと思つたけどそんな高尚な後付けはどうでもいいか。

隣の駅や二つ前の駅で降りて歩いて帰ることをよくやつてゐる。これからはもうちょっとロングなデスタンスも狙つていけるかもしねない。自分の性格としては、これをやらなければならないと思うとやりたくないことで散歩を続けられたらと思つていい。」「散歩をかねて日高屋へ行く」ぐらいがちょうどいい。